

O-1-8-17

当院における静脈内鎮静下でのインプラント治療の統計報告と全身的风险管理
ー歯科衛生士の具体的アプローチの工夫ー○佐藤 宏美¹⁾, 奥寺 俊允¹⁾, 征矢 学¹⁾, 安齋 聡¹⁾, 岡 吉孝¹⁾, 橋口 隼人¹⁾, 洪 性文²⁾, 安齋 崇³⁾¹⁾東京形成歯科研究会, ²⁾日本インプラント臨床研究会, ³⁾順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学講座Statistical analysis and systemic risk management in implant treatment under intravenous sedation at our clinic:
Practical approaches by dental hygienists○SATO H¹⁾, OKUDERA T¹⁾, SOYA M¹⁾, ANZAI S¹⁾, OKA Y¹⁾, HASHIGUCHI H¹⁾, HONG S²⁾, ANZAI T³⁾¹⁾Tokyo Plastic Dental Society, ²⁾Clinical Implant Society of Japan, ³⁾Department of Otorhinolaryngology Juntendo University Faculty of Medicine

I 目的： 超高齢社会の現代において、インプラント治療を希望する患者の全身的风险管理と安全性に対する配慮は必要不可欠である。静脈内鎮静法 (IVS) は歯科麻酔科医の管理下による循環動態の安定化や患者の心理的・身体的ストレス軽減が期待される点においても有効であり、保険収載に伴い無床歯科診療所におけるIVSの更なる普及が予想されるがその統計的報告は少ない。そこで本演題では当院でIVS下に行われたインプラント症例の統計的解析を通してその傾向を把握し普及に伴う課題やリスクへの備えについて検討する。あわせて、歯科衛生士はIVSに関する教育プログラムを受ける機会が少なくIVS下でのインプラント手術に立ち会う機会も限られていることから当院における歯科衛生士の役割を明らかにし、具体的な貢献を探る事である。

II 症例の概要： 当院における2024年1月～12月のIVS下でのインプラント手術症例を対象とし統計的解析を実施した。術前・術中・術後において歯科衛生士が全身的风险管理にどのように関与していたかを患者記録や術中メモをもとに振り返り、チーム内での動きと判断の流れを整理した。特に麻酔科医や術者との連携において歯科衛生士が果たした補助的対応を可視化した。

III 考察および結論： インプラント手術症例全270件中、78例でIVSを併用していた。男女比は1:1.6であり、年齢分布では70歳代が最も多く手術時間が1時間を超える症例においてIVSの適用率が高い傾向がみられた。日本口腔インプラント学会専門歯科衛生士や日本歯科麻酔学会認定歯科衛生士などの専門分野に精通した歯科衛生士の育成は以下の点で重要な貢献を果たすと考えられる。

- ① 患者の安全性の向上
- ② チーム医療の強化による専門的医療の提供
- ③ 手術の効率化により、術者のサポートと手術時間の短縮に寄与
- ④ 患者の安心感が向上し、治療意欲が促進される

歯科衛生士が術前の患者情報の収集、術中の変化に即応できチーム内での判断や情報伝達を支える為臨床的な観察力と連携調整する役割を果たす事はチーム医療の質向上において極めて重要である。今後は当院におけるマニュアル整備と継続的なスタッフ教育の基盤を図りながら、安全かつ安心なインプラント治療を提供できるよう研鑽していきたいと考えている。(治療はインフォームドコンセントを得て実施した。また、発表についても患者の同意を得た。倫理審査委員会番号17000114承認 承認番号25303号)